手加減はどうてもなるが、後者は仲々そうは行かぬ。雜誌の口繪などは多く後者の仕方に屬するであらうが、後者は機械的丈けに精神もこもらないのである、然らば前者の仕方にすべしと云へば大切な時間に大なる相違があるからそれは出來ぬのである。

大略右の如くであるが、何はともあれ之に依つてこれを見れば藝術上の作品をそのまゝ社會に紹介する爲め印刷に附すべく、製版する人、印刷する方は常に人格の高上を計り、技術の研究と云ふ點に大に重きをおくべきであるが、個人としての人は別として、一大工場になどに作業しつゝある人々に於ては、その會社が全々營利的にして、研究室などの設けなき時は又困るのである。現今は實にこの研究室などの何處の工場にも置かねばならぬ話であらう。

以上に依つて見れば未だ〳〵前途は近くなく、故先生や丸山氏の申された言の如く、滿足なプリントを得るに至るには即ちみづゑの卷頭に三色版の變りに石版刷を以てする時は決して近くはないのであらうと思はれる。

彼の洋畫家、水野以文氏、池田永治氏、松原一風氏、鈴木錠吉氏、石井拍亭氏、磯部忠一氏、森本茂雄氏、織田東禹氏、藤島英輔氏等は其前に彫刻や製版術を又は現に該術を研究せられて居る方々であらう。

私は昨年研究所へ行くことになつてからは折を見て、故先生を訪問し、親しく製版上の御意見もくわしく伺ひ、尙自分の製版物に就いては何かと御忠告もして戴かうと思ふておつたが、豈計らんや十月十日、突然御逝去なされたので自分もあへなく雜司ケ谷に御葬送すべき一人となつた悲しさ、誠に我國洋畫界の爲め、印刷界の爲めに千歲の恨事と云はねばならぬ。

それで今は只故先生は多方面に力を盡された內、この石版印刷の發達にも非常な恩人であつた、と云ふことをあらゆる世人に云つておきたいのである。

感じた事

石川縣　湯淺竹次郎

みづゑ第八十九號の挿畫、甲州御嶽の奥、大下先生の上高地には、實に、敬服の外が無い、勿論、彼んな感じの處は、多少旅行をすれば、有るは有る、併し其描寫となると、中々至難である、所謂、何でも無い樣でソウは行かぬ。

僕大下先生のスケツチと丸山先生のスケツチ二枚を藏して居る、之れを手本として、昨日は東、今日は西と各處は寫生を試みるが、まだ自身に滿足(自分丈けの)が出來ない。

箇性(私の)の然らしむる處と、これより此個性描寫に據り勵精し居るなり。

近來大家達から水彩畫の指針たるべき、各種の著作が出る、其書中の頭目には、先づ順序として、必要なる備ふべき繪具の名稱が、列記してある、又郊外寫生として之れならばと、參考に携帶すべき必須色彩も掲げて在る、僕も、種々風景畫を試作し

て見たが、未だ、首肯し難い、只僕一個の意見として、比較的之れならば、大抵其感じを出すに適切と愚考する者を、左に摘記する、諸君も御研究の結果は、本誌上、御發表を賜へ。

クリムソンレーキ　**パーマネント**、**バーミリオン**、**レモンヱロー**　**ネープルスヱロー**　**カドミユムヱローチヤイニスグリーン**、**コバルト**、**オルトラマリン**、**ミネラルブリユ**、**バーントシヱンナ**、**ライトレツド**、**ホワイト**、**バンタイキブラウン**、

右の拾三種とす、紅色としては、此外に、**カーマイン**や、**ピンクマツダー**が有るが、前記の二色でも充分と思ふ。

黄色の裡でも、普通、**ガムボージ**、**イヱルロオークル**、**クロームヱルロ**、などあるが、**ガムボージ**は僕には何だか日本畫的の色彩を出す樣で嫌ひ、又**イヱルロオークム**は**ネープルス**と**カドミユム**及び**ホワイト**等の混合でも出來樣。

綠に**フーカースグリン**、**ヱメラードグリーン**が有るが變色の爲め避けた、**ヱメラード**は、花々敷色だ、が仕方が無い。

藍色には**コバルト**、もよい樣な者の、流石**ミネラルブルー**も捨て難い。

バンダイキブラウンも支那人的の色彩で、他の水彩畫的色彩と平衡が外れる樣に感ずるが、僕には今の處、缺かれぬ。

ニユトラルチントは郊外では、先づ必要、僅微と思ふから除外した。

總じて僕は永久、**パーマネント**、と云ふ事を好むから、先輩大家から變色し易ひと聽いては、一刻も、使用するのは好まぬ、ドシ〳〵止してしまふ、前記の拾三種も、此較的變化せぬのを主眼とした。

嘗て專門の各雜誌や、本誌にも、**チユーブ**入り、同じ色でも其製造社に據り、發色が異ふとあつたが、僕も、實地仕用して、其眞なるを痛切に、知得した、其色は**クリムソンレーキ**と、**ピンクマツダー**と、**カドミユム**の三種だ、(此以外にも有らうが)

最初六錢の**チユーブ**入りで、**ピンクマツダー**は白堊に僅斗り紅色めきた色、**カドミユーム**は**ヱルロオークル**と、**インデヤレヱルロ**と交ぜた如きものだつた、處が其後生粹の**ニユートン**や、佛の**ルフラン**を使つて見ると、可驚、相異と其發色の鮮麗に驚嘆した。

或人は寫生に**ホワイト**を使はぬと云ふ、或人は使ふと云ふ、其佳、不可は僕は之れを云々せぬが恐らく**ホワイト**を用ひずしては、到底、忠實なる空氣や、遠近の稱明は出來まいと考ふ。

殺風景に非ざる東京

愛讀生

自分は屢々學者先生の言葉の内にわけも無く東京は殺風景だ、醜だ、と云つた樣な文句を見聞していつも其の無趣味な事を憐れに思ふのであるが、しかも此の言が美的趣味の標榜者たる美術家の口に聞かうとは、誠にけしからぬ事だと思ふのである。

或る夜のすさびに自分は本箱から古い美術雜誌を取り出して讀むでゐた、其の中に或美術家が斯云つてゐる、即ち田舍の嗜好